

福島縣に於ける古墳分布の狀態

目 次

第一章 總 説	一
第二章 海岸帶古墳	四
第三章 中央帶古墳	三
第四章 盆地帶古墳	七
第五章 結 論	三
附 古墳分布一覽表	三五

寫 真

石城郡夏井村、甲塚圓墳

相馬郡日立木村、家構を有する横穴墳

岩瀬郡濱田村・蝦夷穴圓墳

地圖

藤原川流域古墳分布圖(五萬分之一)

阿武隈川流域古墳分布圖(五萬分之一)

阿賀川流域古墳分布圖(五萬分之一)

鶴沼川流域古墳分布圖(五萬分之一)

相馬郡真野村大字寺内字八幡林古墳群實側圖

石川郡澤田村大字新屋敷字大壇古墳實側圖

福島縣地形斷面圖(一十萬分之一)

福島縣古墳分布圖(三十八萬分之一)

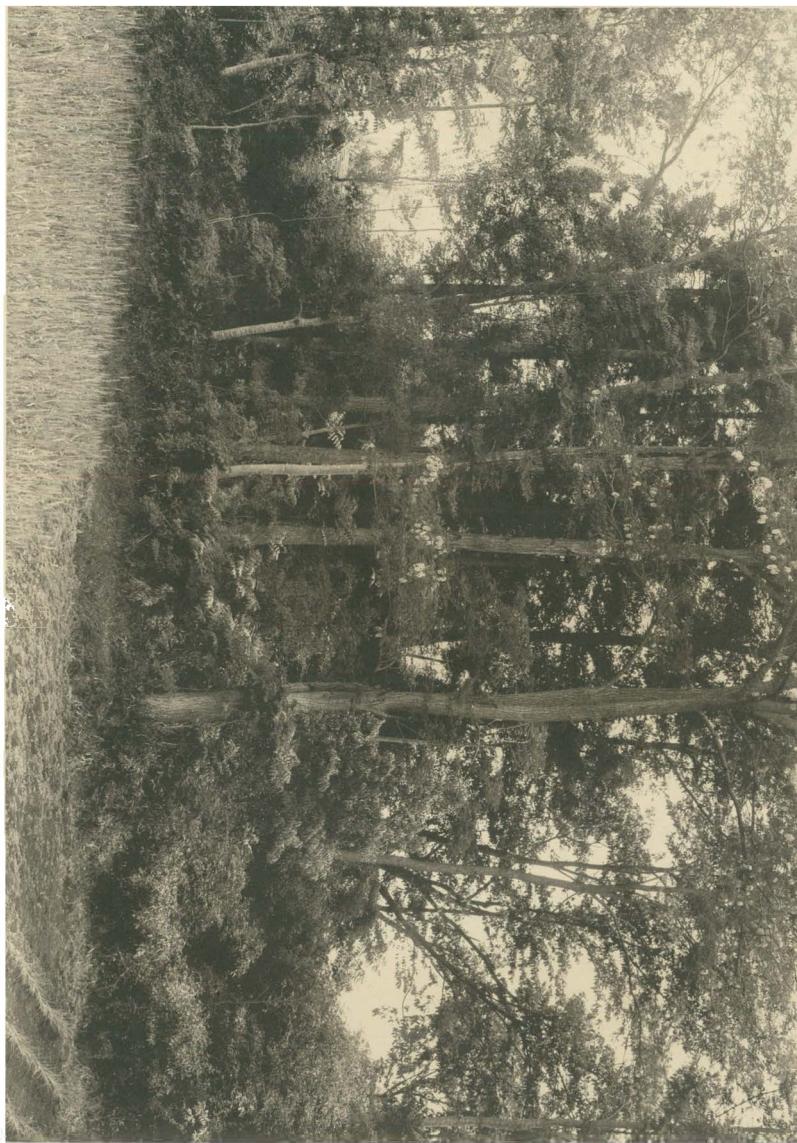


墳古墳甲日田荒字大村井夏郡城石

相馬郡日立市大木下日下石橋を有する穴口を擴大する工事



墳圓穴夷轂田和宇大村田濱那瀬岩



福島縣に於ける古墳分布の状態

第一章 総 説

我國先史時代末期の製作焼成にかかるものと見られ得る土器の底面に、稻實の壓痕を有するもの隣縣宮城に在り、宮城郡多賀城村大字樹形圍貝塚、人類學雜誌四十卷第五號、山内氏所報、また本縣河沼郡八幡村の遺蹟に土器の焼成に粋穀を使用したことを示す遺物がある、されば稻實即ち米は我國に在りて先史時代の末期の住民には、その食料の一部分として利用されたものと想像される、而して先史時代の末期より徐々として穀物栽植の農業期に入つたものであつて、世の所謂新來の大和民族によつてのみ此地の農業期が開始されたものと斷定することが出來ぬ、それは以上の遺物の出土地が、彌生式の先行遺蹟に所屬するからである。既に耕作の利を知つた上代の民族は、その耕作地域を耕作利用に最善の條件を具備する方面に求むるに至つた、本縣に在りては阿武隈山地に水源を置き東流す

る鮫川以北の各河川の沖積層地帶を中心として隨所に彼等の集團が營まれ、また縣の中央部を貫流して北進する阿武隈川の本支流、會津高原を西走して日本海に入る阿賀川の本支流の各所に彼等の農業生活の基礎が形造られたのは當然であらう、これらの民居の大小集團の歸結が古史上所傳の「國」であつて下つては奈良朝、以降の行政區劃名たる和名抄の各「郡」「郷」の基礎を形成したのである。

此時代の海岸方面の土地の利用即ち自然人文の接觸線は丘陵を負へる海拔四十メートル以下の地域であり、中央部に在つては海拔五十メートル以上三百四十メートル以下の地域であり、會津盆地に於ては海拔二百メートル以上二百八十九メートル以下の地域である、かくして隨所に聚落は成り自然と人文との接觸は先史時代に比して著しく濃厚となり活潑となつた、而して聚落はその内容を豊富ならしむる諸般の施設と、生産方法の進歩と交通の發達とによつて一層の繁榮を見た、さりながら此時代の地方は文字記録の上に成立の姿を見せて居らぬ、これ即ち原史時代の名のよつて起る所以である、文字記録によつて此時代を知ることが出来ぬ、是非其その遺蹟遺物によつて此時代の相^{スガタ}を把握せねばならぬ、此時代の民族は

死者の爲に特殊の墳塚を營みつゝあつた、一つは封土を置ける圓形墳、その圓形墳はまた種々に變化して瓢形墳、方形墳等となつた、一つは自然の地形斷崖面を利用せる横穴墳である、これらの墳塚の營造が此時代の特式であるが故に原史時代、また古墳時代の名のある所以である、各種各様の墳塚が築造されたといひそれに伴隨せる棺槨、其他の副葬品に通有の方式あれば後代のそれとはおのづから區分されるべきものである、此時代の服飾、住居の状態を始めとし文化のすべては古墳と古墳關係の遺物の上に反影して居る、またこの時代は上記の如く地方産業史即ち農業史、工業史、土木史、交通史、或は政治史、經濟史等あらゆる文化史の基礎を鞏固にした時代であつて、地方的に、此時代を明白ならしむることは我國の現状に於て特に重大なる意味を有する。

古墳の實數はその時代に於ける民居の密度を指示するものである、古墳の歲月経過の間に於ける破壊率は、開墾其他による、全縣を通じて同一程度と見て古墳の現存實數を以てその時代に於けるその地域の開發のパロメーターとしてそれぞの地域を觀察した。

第二章 海岸帶古墳

四

阿武隈山地を削剥流下した土砂の類が東部海底に堆積しそれに火山事變の加はるあり、その噴出物を交へた水生層が、第三紀に於ける阿武隈山地の隆起上昇によつて海面上に出現した海岸平野が即ち磐城海岸第三紀層である、隆起上昇によつて若返つた阿武隈山地部の各河川が、その先天流向によつて新生平野を支配し幾多の横谷を刻み、それに断層と海蝕の加はるありて東西に長き低地浦潟を生じた。その低地浸水部が、不斷に進む土地隆起作用と河成海成の沖積作用の共働によつて平原化し今日の地形を成立せしめたのである。海岸帶の古墳は石城郡勿來町大字關田字關山横穴墳を以つてその南限となすべく、同所を北東一里を隔てゝ同町大字白米字酒井原の圓墳群がある、錦村大字中田七曜塚圓墳群、同村大字江栗の横穴墳、同村大字長子の横穴墳は、植田町大字後田圓墳及び大字仁井田前方後圓墳と鮫川を中心にして南北相呼應して居る、海岸に近き植田町大字佐糠、東田、岩間の各所に圓墳群及び横穴墳群がある、それらの古墳の密布は上代の「道奥菊多」の國「道

口岐閑國の發達を示唆し、下つては和名抄所戴の酒井、河邊、大野、山田、餘等奈良朝以後の五郷の基礎をなすものである、越えて藤原川の流域を見れば古墳は同河と矢田川の合流地點に密集して居る、石城郡玉川村大字南富岡字入八郷圓墳及び字眞石の横穴墳群、磐崎村大字長孫の横穴墳群、同村大字西郷字忠多の圓墳及字岩崎の横穴墳、湯本町字辰ノ口横穴墳、同町大字關船字據作横穴と磐崎村大字下船尾横穴墳等は川の西方に位し、玉川村大字岡小名字君ヶ塚圓墳、字水押横穴墳群、同村大字大原より大字相子島に續く横穴墳群、同村大字林城字塚前墳址、同村大字金成横穴墳、同村大字岩手圓墳、鹿島村大字御代字合曹子二ヶ所の横穴墳群、字九反田及字柿境の横穴墳群、同村大字船戸字八合横穴墳群、同村大字久保字大玉横穴墳群、同村大字下矢田大字上矢田字小田小路圓墳等は藤原川の東方に存する、川の下流には泉村大字下川字烟中圓墳字須賀蛭の横穴墳群、支流釜戸川流域には渡邊村大字田部字天神前横穴墳群がある、これら古墳の密集によつて當代に於ける此地域の開發を察し得る、更に北に進めば夏井川の流域である、藤原川と夏井川との河口の間海邊に近き所に存する古墳を擧ぐれば、江名町大字下神白字武城の横穴墳群字千速

の圓墳群、同町大字永崎の横穴墳、豊間村大字豊間の横穴墳、同村大字沼ノ内圓墳、高久村大字神谷作字細谷の圓墳址、字腰巻の横穴墳群、同村大字下高久字川和久の圓墳群及横穴墳、字牛轉の圓墳、飯野村大字上高久字神下の横穴墳、同村大字小泉の横穴墳等がある、此前方に飯野、夏井の二村を抱擁して海岸に突出する礎灰岩の周囲三里の丘陵を見る、千五穴の里稱の存する所、丘陵の各所に横穴墳群を存する、飯野村大字中山字下ノ内、字宮下、字柿ノ目、字柳町、字諫訪下等の横穴墳群、大字南白土字大作及び大字谷川瀬字堂ノ入横穴墳群、夏井村大字菅波の横穴墳群等である、此丘陵の南側の飯野村大字下荒川字五里内に圓墳あり、その北側に存する夏井村大字荒田目字甲塚圓墳は夏井川の畔りに威容を示して居る、夏井川の上流には平町松ヶ岡公園下の横穴墳、平窪村大字上平窪横山臺酢釜臺の圓墳群、同村大字平窪石森山下の横穴墳群及び横穴墳、大字小谷作の横穴墳がある、支流新川の奥には内郷村大字高坂字臺の墳址があり、大字内町の横穴墳がある、夏井川の北方仁井田川との間には草野村文字馬目字町田の圓墳址字作ノ内横穴墳、大字北神谷字御代作の墳址字吉野作

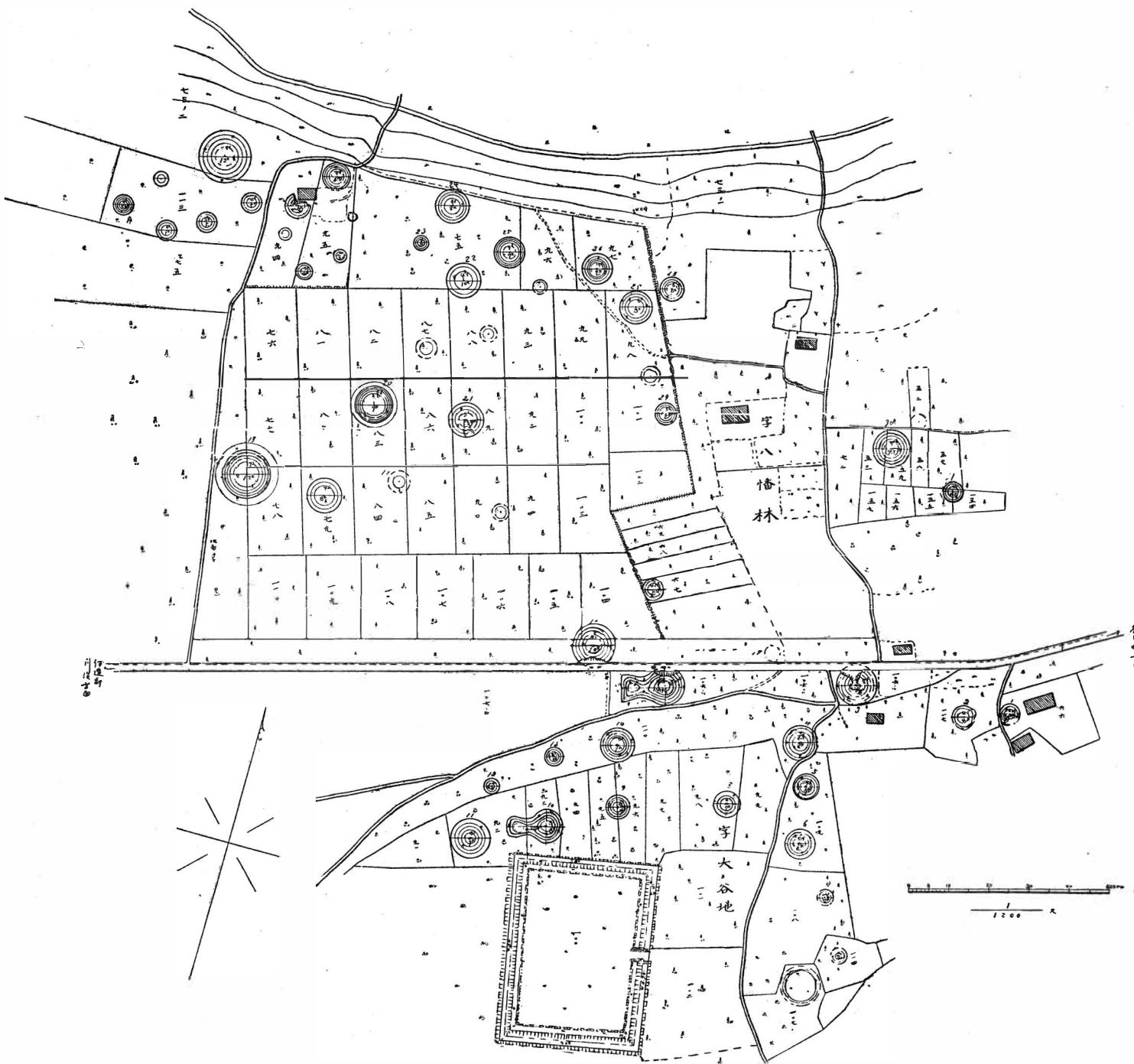


の横穴墳群がある。仁井田川の流域には大野村大字玉山七曜塚圓墳群字南作の横穴墳群、大字山田小湊、及大字戸田横穴墳群、大浦村大字上仁井田字岸前の横穴墳群等がある。蓋し原史時代の「石城」の國は上記古墳の分布線上にあつたのであらう。此地の和名抄郷名は十二、延喜式神社は七、以て上代に於ける發達の度を推測するに足る。仁井田川と大久川との間に砂岩丘陵が起伏重疊して居る。大久川の海に入らんとする所西南面せる丘上に一個の圓墳を見る。淺見川を越えて木戸川に至れば洪積層の臺地沖積層の小平原を擁して原史時代に於ける相當の發達の状を示す。双葉郡木戸村大字山田岡字名吉屋、同村大字小塙字上ノ原横穴墳群、大字前原字田中内墳趾、大字北田の圓墳群及横穴墳群等がある。木戸富岡の間にも海に迫る丘陵がある。富岡川の河口佛濱に二ヶ所の横穴墳群があり、上岡村大字本岡字坊小屋には王塚とよぶ圓墳がある。熊川を渡れば熊町村大字夫澤鐵道線路附近に三個の圓墳を見る。夫より北進して新山村に入ればこゝは古墳の密集地帶である。新山村大字新山字清戸迫横穴墳群、同村大字郡山字塚ノ越圓墳群、同村大字細谷及び小澤の圓墳群等前田川の流域に近く分布して居る。前田川と請戸川の間には海拔四

五十メートルの礫灰砂岩層の丘陵海岸に突入し各所に横穴墳を見る。長塚の地名の出所も此墳群に存するであらう。長塚村大字長塚字寺内前字北田の横穴墳大字鴻ノ草字岩井作字東作の横穴墳群、大字滝川の横穴墳等はその重なるものである。此丘陵の北は請戸川の沖積平原である。請戸川の支流高瀬川、泉田川の間に介在する洪積層の臺地に於ける古墳を擧ぐれば浪江町大字川添正西寺を繞る圓墳群、刈野村大字下加倉の圓墳群等であり、正西寺附近の圓墳群中には墳丘の大なるものありて舊大字名高塚の出所を示して居る。浪江町の東北には幾世橋村大字北幾世橋圓墳群刈野村大字藤橋の圓墳及横穴墳があり、浪江町の西南には大堀村大字酒井の鎧塚圓墳がある。請戸濱附近大字請戸横穴墳群は前記の長塚丘陵の東北端に位置する。上代の「染羽」の國の中心は此地域と見て差支あるまい。浪江と小高との中間、丘陵の東方は井田川浦を挟む。浦に近く相馬郡福浦村大字浦尾字臺ノ上墳趾、大字耳谷字山澤横穴墳群があり、同村大字耳谷大字福岡、大字泉澤共に横穴墳群を有する。小高川の河口に近く小高町大字塚原字訪諏の原圓墳群、字日向字堂林の横穴墳群がある。大字吉名字漆原の横穴墳は石窟佛と聯結して居る。大甕村大字大甕字

相馬郡真野村大字寺内古墳群実測図

東北



村大字今田字地藏前墳阤は、中村町字西山横穴墳群と南北相對し、松ヶ江村大字小泉字坪ヶ迫、字根岸、字山田の横穴墳群、同村大字本笑字西和田の横穴墳群は宇多川の北岸丘陵中に存する、新沼浦に近き大野村大字塚ノ部には二ヶ所に亘りて圓墳がある、その大字名塚部は、當代に於ける塚部の部民の居に得たるものであるかも知れぬ、駒ヶ嶺村字富穴前横穴墳群、字藤崎の圓墳、新地村大字小川字二羽渡及び大字杉ノ目字中丁には圓墳群があり、大字大戸濱には横穴墳群がある、福田村大字塚木崎字塚濱圓墳は本縣古墳の分布線の北限をなすものである、眞野川、宇多川の流域が原史時代に於て特殊の發達を見たことは如上の古墳の群聚と、墳丘の大と、内構の精と副葬品の優とが明白にこれを證據立てゝ當代の「浮田」の國の繁榮を表示して居る、此地域の和名抄の郷名は十、延喜式神社は九といふ數字であつた。

本縣の各帶に就きて、古墳の數量を檢するに海岸帶に於て最も密布の状を見る、これ確に當時に於ける民居の數の他のそれに比して卓越せるを示すものである、そしてその民居の密なるを致したのは、海岸地帶の構造が頭初に述べたる如く丘陵平原交互に相並び隨所に後丘前耕日射と水利とを併有せる地域を展開し、その

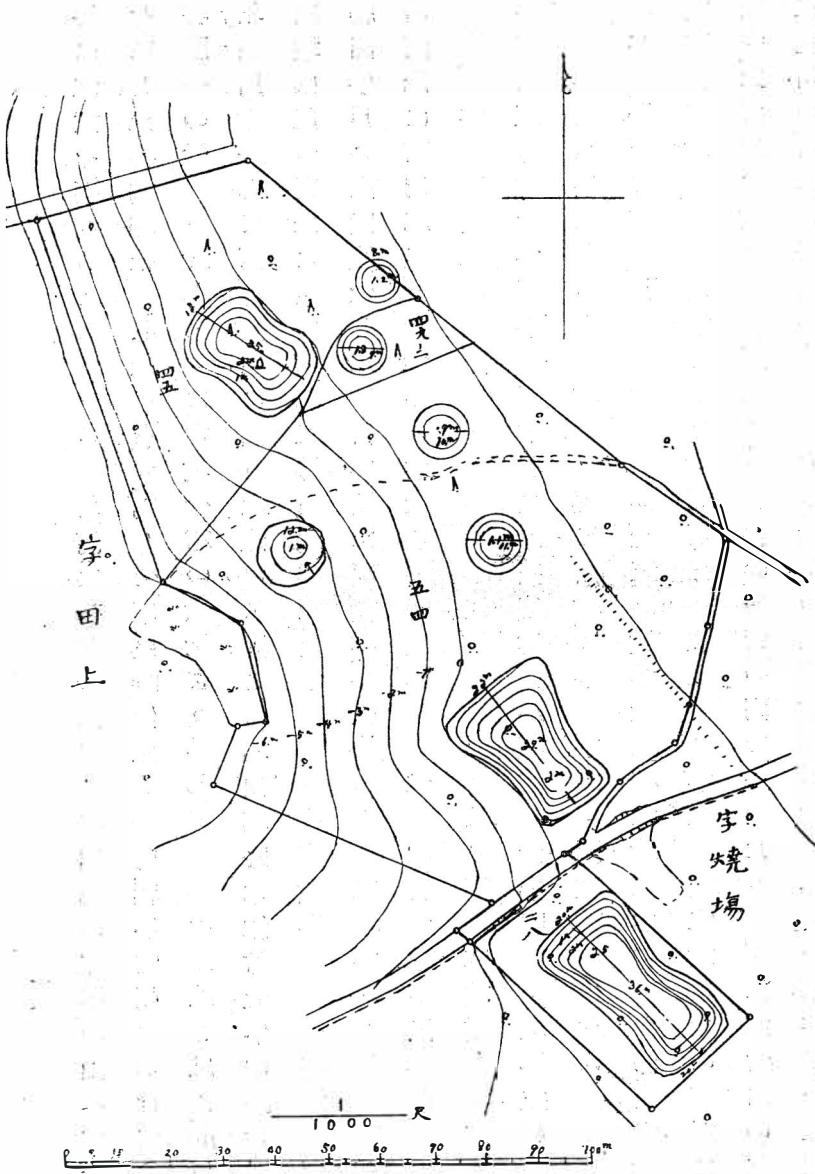
耕地の多くは第三紀層、中生層、古生層の破壊混和の沖積に成り、おのづから沃土たらしめたことがその主因をなすであらう。眞野川流域、請戸川流域、鮫川流域はその尤なるものである。また氣温の點、海産物の點に於て中央會津の二帶に比して恵まれて居た。また海岸汀線に砂鐵の産の多かつたことなども此地の上代の開發を探る上に於て見逃してはならぬことであらう。

第三章 中央帶古墳

本縣中央地帶の南限に東白川、西白河の郡名を存す。東白川郡は久慈川の地溝に沿ひ、西白河郡は那須火山の裾野の東、阿武隈縱谷に至るの間に位置する。東白川郡は久慈川を以て常陸の國に聯絡し、西白河郡は毛野の國に接續して共に白河の名を以て汎稱された區域である。まづ久慈系の古墳を擧ぐれば、東白川郡高城村大字伊香字高野里圓墳及び同村大字臺宿字上ノ原圓墳群は久慈川の西岸段丘上に存し、常世盆地の中には常豊村大字常世北野字赤坂に横穴墳がある。近津村大字双ノ平字原前圓墳、同村大字寺山字豊岡及び大字流の横穴墳群は久慈川の東岸に、同村大字塙原字強清水字森ノ上圓墳群は其西岸に在る。久慈川は砂金の產地であり、水源地の八溝山には延喜式八溝山神社あり、山麓には都々古別神社が奉賽せられた。高野、依上、常世の和名抄郷名を有して小區域の割合に上代の發達を致せる所以の基礎は、古墳時代に於て形造られて居たことを示して居る。常陸より奥州に入る官道も此の地に開けて長有の驛の名を止めた。更に眼を轉じて阿武隈川上流の地を

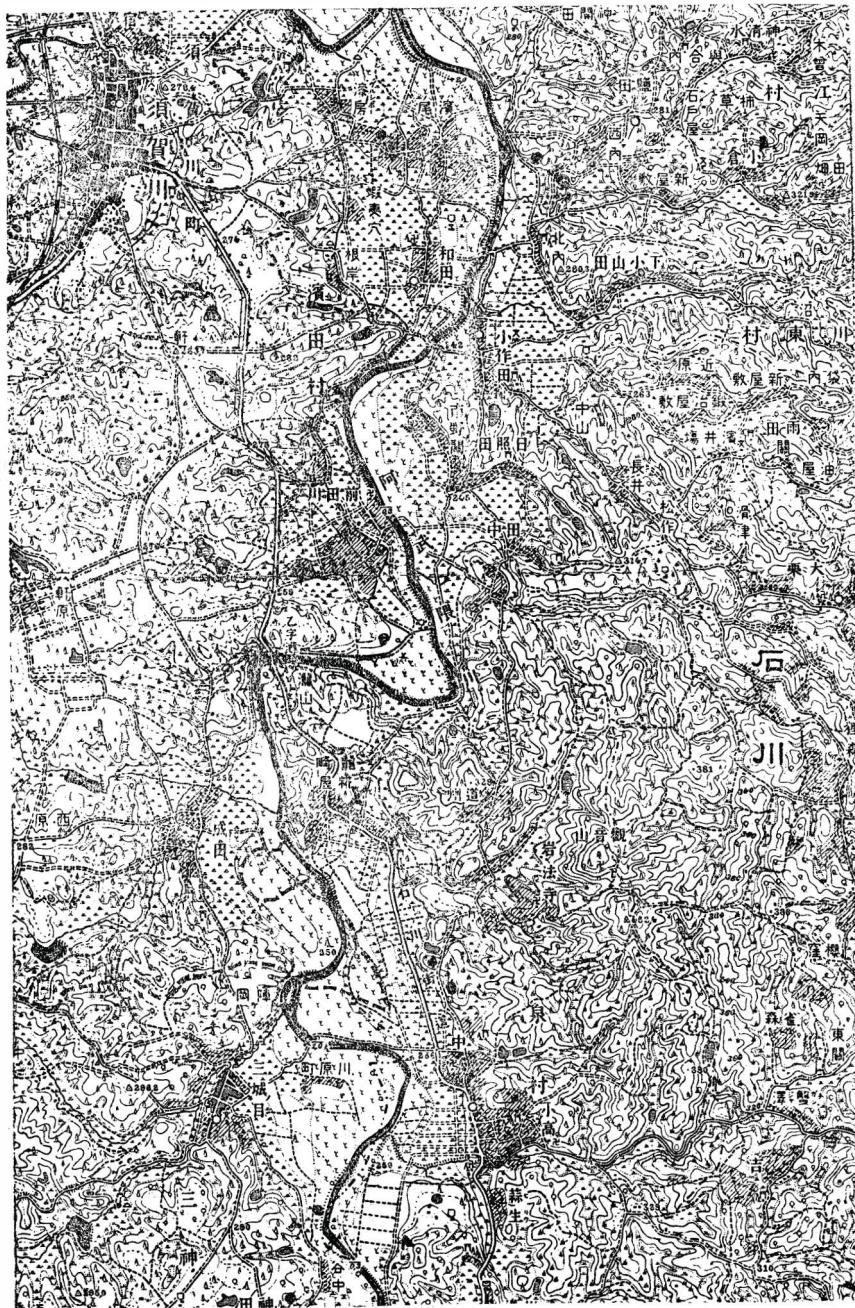
見れば古墳は西白河郡白河町以東、大沼村、五個村、釜子村、吉子川村、石川郡澤田村等川の兩岸段丘及びそれに連接せる丘陵の各所に群在して居る。白河町字風神山東の横穴墳、大沼村大字大字岩倉横穴墳群、五個村大字双石字六本木瓢形墳、字廣久保横穴墳、同村大字舟田字中道瓢形墳、大字借宿字西原圓墳、釜子村大字柄本圓墳群、大字千田字下原瓢形墳、太字孫八字西ノ内圓墳、大字形見字岩崎圓墳、大字深仁井田字天上林墳、吉子川村大字二子塚瓢形墳、及横穴墳、大字吉岡字向山圓墳群、石川郡澤田村大字赤羽圓墳群、大字新屋敷字大段瓢形墳及び圓墳群等である。これら古墳の所在地が彼の「白河」の古國の跡と見るべく、殊に五個、釜子、澤田の墳群には墳丘の雄なるものがある。また社川方面には、白河の關に近き古關村大字番澤字原の圓墳、金穴墳群、石川郡淺川村大字瀧輪字裏山圓墳群等がある。阿武隈川の支流泉州の上流には西白河郡川崎村大字踏瀬字觀音山の横穴墳群がある。太平洋に注ぐ鮫川の上流、阿武隈山系の中央部に當る東白川郡宮本村大字山上字宮ノ前圓墳群の存在は、本縣海岸帶中央帶の當代に於ける交通關係を指示するもので、本縣の古墳分布上

石川郡澤田村大字新屋敷古墳實測圖 編尺一千分之一



石川郡澤田村大字新屋敷古墳實測圖

特に注意を要するものである。白河は和名抄郷名久慈川筋の三郷を加へて十七を算し、延喜式神社は七社を有す、而して原史時代以後奈良朝平安朝にかけて中央帶隨一の隆盛を致した之は古墳分布の數量より推して當然の歸結と思ふ、社川の北須川キタスと合して阿武隈川に入り北流するところ石川郡野木澤村大字中野字惡戸圓墳は川の東岸に西白河郡三神村大字明新字沼和久横穴墳、字座頭の圓墳群、大字神田字戸ノ内圓墳、大字三城目字横山圓墳群、字弘法山の横穴墳、字塚ノ越墳趾は川の西岸に石川郡泉村大字小高字大隅平圓墳群及横穴墳同村大字中里稱蕨ヶ岡圓墳群、大字龍崎横穴墳、川東村大字田中字東館圓墳群、字入ノ塙横穴墳群、大字市ノ關字前田瓢形墳、大字下小山田字北ノ内圓墳群は小鹽江村大字鹽田の境界線につゞき大字鹽田字大草の方形墳、字大壇の圓墳、大字堤字前原圓墳群等は共に川の東岸に存し、岩瀬郡濱田村大字前田川字大塚圓墳、字伏見横穴墳、大字和田大佛横穴墳、字蝦夷穴圓墳、大字濱尾字兜塚圓墳、石川郡小鹽江村大字江持横穴墳は川の西岸に配列す、此兩岸古墳の密集區域こそ上代の「石背」の國であつたらう。釋迦堂川の支流江花川の沿岸に岩瀬郡梓衝村大字横田の横穴墳、稻田村大字保土原字保土塚圓墳



△有墳・横穴・封石・西
古墳分布図

がある。大字稻字北木戸横穴墳は釋迦堂川の川縁に開口す、また滑川流域に仁井田村大字仁井田の墳跡がある。阿武隈川を北に進めば谷田川の合流地點がある。こゝに古墳の密集を見る。田村郡守山町大字御代田圓墳群、大字細田字向原圓墳群、谷田川村大字谷田川字石塚圓墳、高瀬村大字小川字下田の横穴墳群、大字下行合墳跡等である。安積洪積臺地を横流する南川と逢瀬川の中間地域には、安積郡大槻村の古墳群がある。字大槻、字愛宕東、字室木、字蝦夷塚等に散在し、北には富田村字天神南、片平村字庚塚原の群墳がある。笹原川の奥には三和村大字鍋山圓墳群がある。阿武隈川の蛇行する袂の中に郡山市大字横塚字前田の圓墳があり、富久山村大字福原字陳場に圓墳群がある。谷田川、大瀧根川、笹原川逢瀬川の阿武隈川に合する所、此の地域に上代の「阿尺」^{アサガ}の國は成り立つた。安積の和名抄、郡名數は八、延喜式神社數は三である。阿武隈川小和瀧橋の附近田村郡逢隈村大字三丁目字平に墳跡があり、此處を東に二里を隔つる同郡御木澤村大字平澤海拔三百四十メートルの位置に圓墳がある。古墳時代の開發此地點に及べるは最も異とすべきものである。安達太郎山の麓を流るゝ安達太郎川杉田川の流域が原史時代に於て相當の開發を見た

ことは、安達郡本宮町愛宕山上の圓墳、字南ノ内圓墳群、玉ノ井村字薄黒内、字大塙の圓墳群、大山村大字大江字二子塚瓢形墳、字山崎後圓墳、大字柵山字苗松山横穴墳群、杉田村大字北杉田字落合圓墳等の遺存することによつて明白である。阿武隈川の東岸和木澤村大字高木に墳跡がある。阿武隈川が郡内大平村、上川崎村々界に於て東折して阿武隈山地に突入し、移川其他の水流を集めて北行する所二里の東に針道村字上ノ内、字壇ノ平の圓墳群がある。是より北は信達の地である。信夫郡平田村大字平石字石名坂圓墳群、字雷電前墳跡、杉妻村大字伏拜字利十屋敷圓墳群、大字黒岩字學壇圓墳、字岩山横穴墳、大森村大字永井川字八幡館墳跡、鳥川村大字下鳥渡八幡塚及び稻荷塚圓墳、吉江田村大字方木田字稻荷塚圓墳、渡利村大字小倉寺墳跡、岡山村大字岡部字大壇圓墳、大字山口字御春新田圓墳群等、阿武隈川沿岸一里以内の地に分布するこれより、北瀬ノ上町大字向瀬ノ上字道田圓墳群、伊達郡上保原村字内山圓墳群、太田村大字大泉より保原町に亘る圓墳群は阿武隈川の東岸に存し、伊達郡長岡村大字長岡字館ノ内墳跡、湯野村横穴墳、伊達崎村大字上郡字地根木山圓墳、森江野村大字塚目字錦塚圓墳、八幡塚圓墳、藤田町大字石母田字硯石横穴墳大

枝村大字西大枝字王壇圓墳等は阿武隈川の西岸に位置する以上古墳の分布線即ち上代開發線が、上代の所謂「信夫」の國である、和名抄の鄉名は八と云ふ數字を示して、安積會津と匹敵して居る、拓地面積小にして同等の人、煙密度を保持し得たのは天惠の多大であつた故であらう。阿武隈川はその流域地方に於て花崗岩、其他新舊の火山岩、第三紀層各種の岩石の露爛に成る土壤を流下し來りて此陥落盆地に沖積し地味の肥沃なる平野をつくつた、此地に於ける古墳時代の發達の因はこれであり、有史後に於て蠶業地として天下に名を成せる理由も亦こゝにあるであらう。

本縣中央帶に於ける古墳は、阿武隈川を中心とし、兩岸二里以内の地に帶狀をなして密布して居て、支流方面は存外稀薄である、これによりて人文開發線を辿れば、おのづから上代各國郡の中心地點も、その交通路線も察知し得らるゝのである、而して阿武隈山系と阿武隈川とは、豊富なる天然資源を藏して上代人文の開發を促しつゝありし實狀を考查して、我等は無限の興味を感じるのである。

信夫郡渡利村土壤分析成績表

土性 壤土
洗滌分析
粒徑

一〇ミリメートル以上

一〇乃至八ミリメートル

八乃至六ミリメートル

六乃至四ミリメートル

石礫合計

原土中細土ノ百分率

細土百分中組成分

四乃至三ミリメートル

三乃至二ミリメートル

二乃至一ミリメートル

一乃至〇、五ミリメートル

○

○、一四三

○、二五七

三、二一〇

○、五乃至○、一五ミリメートル
○、一五乃至○、一ミリメートル
○、一乃至○、〇五ミリメートル
○、〇五乃至○、〇一ミリメートル
○、〇一ミリメートル以下

細微土百分中組成分

○、五乃至○、一五ミリメートル
○、一五乃至○、一ミリメートル
○、一乃至○、〇五ミリメートル
○、〇五乃至○、〇一ミリメートル
○、〇一ミリメートル以下

原土ニ對スル細微土ノ百分率

細土ニ對スル同上

化學的分析

乾燥土重量百分率

粗土容積百分率

密土

水分(風乾土百分中)

燃灼ノ際消失セシ分

炭素(腐植物トシ算ス)

全 窒 素

鹽酸ニ不容解残物

鹽酸ニ溶解セシ硅酸

炭酸曹達ニ溶解セシ硅酸

硅酸合計

礬 土

一半酸化鐵

一 酸 化 鐵

酸化マンガン

石 苦 土

加 灰

里 土

加 苦

里 土

加 苦

里 土

三、八二九

三、五六四

五、五八九

六、二八七

五、六三〇

八、八二九

六五、六七八

〇、二四八

九二、二二八

五八、八〇五

〇、二三四

〇、三四八

〇、二四八

八、〇六一

一二、七五一

九、〇八一

八、三五三

一三、〇九九

九、三二九

七、六三四

一一、九七二

八、五二六

二、九八九

四、六八八

三、三三八

二、七〇二

四、二七七

三、〇一七

〇、一〇一

〇、一五九

〇、五八一

〇、五九一

〇、八一五

〇、七六四

〇、七六四

一、一九九

〇、二六二

〇、二三四

〇、三六八

二〇、六一五

二三、九八二

一五、八三六

一一、六九五

一四、二五二

二四、二五二

曹達酸	〇、一六二	二四
硫酸に溶解せし粘土成分	一〇〇『グラム』土壤吸收量『ミリグラム』	三、七一〇
硅礬酸土	〇、〇九五	〇、一三四
硫酸に溶解せし粘土成分	〇、〇八五	〇、一三三
硅礬酸土	〇、〇七二	一、〇一二
硫酸に溶解せし粘土成分	〇、六四五	五、二二一
硅礬酸土	四、九三八	五、四二二
磷酸吸收量	一四八、四八〇	五、二二五
硅素吸收量	三五、三七四	七、七三四
主成分及吸收量ヲ細土中ニ改算ス	一四三、一六六五	〇、一四二六
磷酸吸收量	一四三、一〇六五	〇、〇八七六
磷酸吸收量	三四、〇九三八	〇、一四二六
同上原土中ニ改算ス	〇、〇八七六	〇、一四二六
加里	〇、一四二六	〇、一四二六
磷酸吸收量	一九、一九三	粗土
磷酸吸收量	二三、三三七	密土
磷酸吸收量	一四、七四三	三〇、〇九八
磷酸吸收量	一〇、八八八	三五、〇一四
磷酸吸收量	二三、五七九	一三、一二一
磷酸吸收量	二、六七三五	一七、〇七五
磷酸吸收量	九三、一	三五、四〇八
比重	〇、九一八三	一四六、〇
重量百立方センチメートル	一、四七八	一、四七八
容積比重	三、八二八	三、八二八
水分(風乾土百分中)	〇、九一八三	〇、九一八三

磷酸
磷酸吸收量
磷酸吸收係數
磷素吸收係數

理學的試驗の成績

細微土理學的組成分百立方センチメートル中『グラム』

粒徑

填充ノ度

粗土

密土

〇、五乃至〇、一五ミリメートル
〇、一五乃至〇、一ミリメートル
〇、一乃至〇、〇五ミリメートル
〇、〇五乃至〇、〇一ミリメートル
〇、〇一ミリメートル以下

比重
重量百立方センチメートル
容積比重
水分(風乾土百分中)

水分(百立方センチメートル含量)

三、五六四

五、五八八

孔
容水量(風乾土百分中)

六六、五〇八

四七、四八〇

容水量(百立方センチメートル含量)

四五、七八六

三〇、一七二

最高ノ大氣透通

四〇、九九七

四二、三六五

最低ノ大氣透通

六二、六八〇

四一、八九一

水立方メートル

二五、五一

五、一一五

十センチメートルノ高ニ水ヲ吸昇セシ時間

二時十五分間

二時三十分間

一ヘクタール(凡一町歩)ノ面積ニ深サ『十センチメートル』中水ヲ飽和シタル境遇ニ於ケル水及大氣ノ容積

四〇九、九七

四二三、六五

水立方メートル

二五五、一一

五一、一五

大氣立方メートル

二五、五一

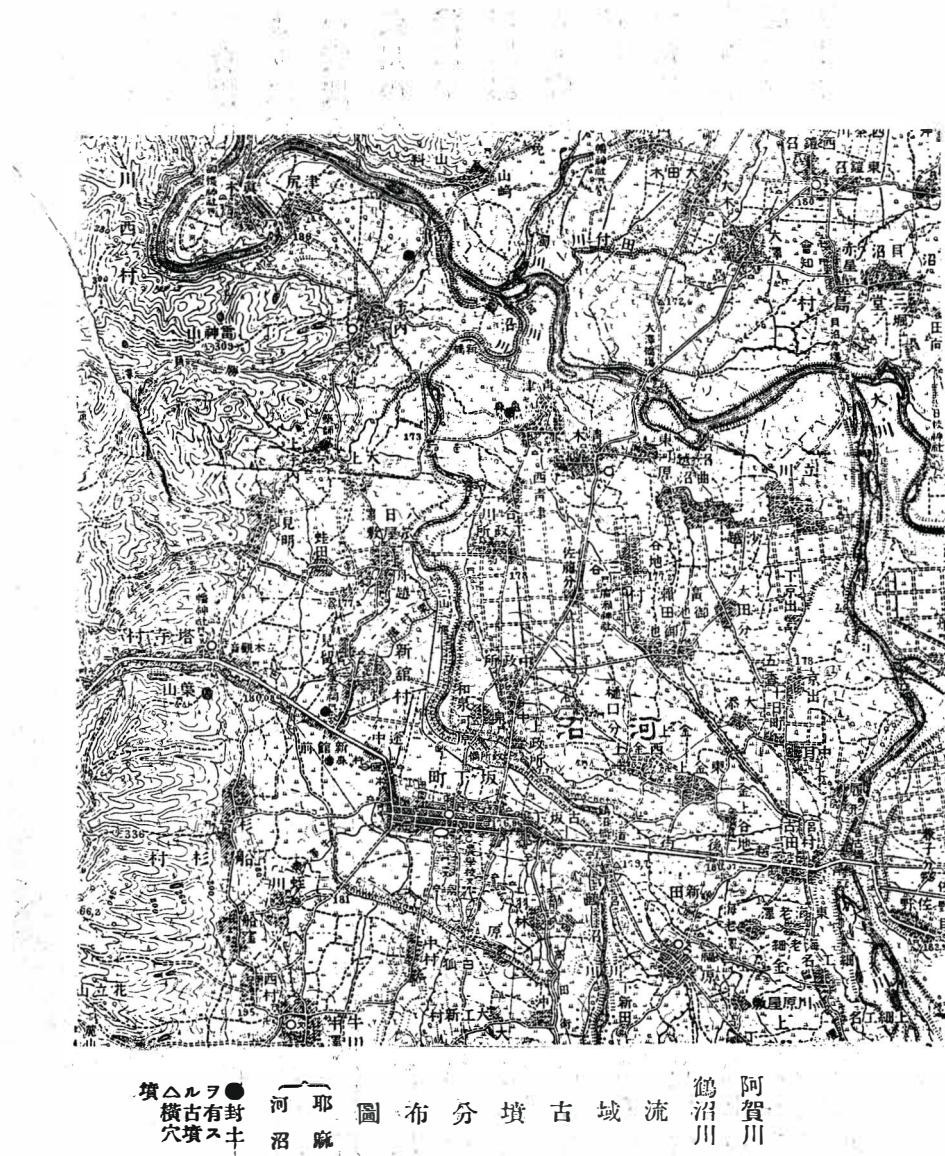
二七

第四章 盆地帶古墳

會津の古墳は總説に於て述べた如く、會津盆地の周縁の各所、海拔二百メートルより二百八十メートルの間に存在して居る、之によつて同時代に於ける土地開拓の實狀も略推定せらるゝと思ふ、そして古墳分布の密度は盆地の西部、鶴沼川と阿賀川の合流地點、耶麻郡慶徳村、河沼郡川西村より大沼郡高田町附近に亘る地域に濃厚である、先此地に於ける古墳分布の狀態を述ぶるに當つて第一に擧ぐべきは耶麻郡慶徳村大字山科字墓東の横穴墳群である、これは明治二十年頃狩獵關係より穴の所在を發見して種々の發掘物があつた、會津は横穴古墳のわけても貪弱なる所である、此横穴の調査は會津の古墳研究に重要な位置を占むるものであつたけれども非學術的に破壊されてしまつたのは何よりの遺憾である、阿賀川を越て鶴沼川の流域を見れば、河沼郡川西村大字宇宇内の圓墳群、同村大字大上の圓墳、廣瀬村大字青津字館ノ越圓墳群、新館村字森前圓墳、坂下町字大道圓墳、八幡村字塔寺圓墳群、大沼郡新鶴村大字佐賀瀬川墳、同村大字米田字供養壇圓墳、字永尾の圓

方墳群、赤澤村大字赤留墳^{アカル}、北會津郡門田村大字飯寺^{アヒナラ}圓墳、同村大字黒岩字小田圓墳群、若松市榮町字西分圓墳、一箕村大字八幡一箕山上圓墳群、耶麻郡駒形村大字金橋字堰上圓墳群、同村大字中屋澤字七ツ壇圓墳群、字深澤圓墳、喜多方町經塚圓墳、岩月村大字宮津、字宮地圓墳群等である。如上の古墳の位置のすべてが海拔二百八十メートル線以下に屬するにかゝはらず、一つの例外は北會津郡湊村大字赤井谷地字平下山の瓢圓墳群である。これは海拔五百メートル線を突破して居る。

以上は會津全部に於ける古墳分布の概要である。其面積に對する分布の密度はどうしても稀薄であるといはねばならぬ。會津溫故拾要抄所載のものは徵證不充分のものが多い。會津は古史所傳の國であるけれども、古事記相津の記事古墳時代の發達のパロメータをなす。古墳の數量は全く貧弱であつて、これを本縣中央帶、海岸帶と比較して同時代の會津の開發の不振であつた事を思はせる。和名抄鄉名數八、延喜式神社數三といふ數字も此地の開發關係を反影して居るものと見られよう。然らばこれは何に原因するか。會津は四方山嶺を繞らし、その中央部より東部にかけて周圍十七里的猪苗代湖がある。その湖の水は落ちて西に流



れ盆地の水と山地部の水とを合せて阿賀川となり、越後山脈の裂罅線を削剥して越後に出で日本海に注ぐ、會津盆地沖積原の成立は國境山地に於ける海拔百七十メートル線までの水蝕作用を條件とするが故に、原史時代の會津盆地は今日の如き冲積作用の完成を見なかつたであらうと思ふ、爲に盆地の中央部は沮洳の湿地多く、耕作に利用する地域たり得なかつたので河沼郡笈川村に於ける泥炭層の存在の如きはその證左ではあるまいか。盆地の中央部に古墳を見るとの出來ぬは此理由の然らしめたので後代の河水の汎濫によつて埋没したものとは見られない、會津の古墳時代の他に比して遜色あるは農耕地として利用すべき地域の今日に比して一層縮小されて居た結果であらう。此時代の盆地が冲積作用の成年期に達して得なかつたことを想はするもの近代に於ける阿賀川が會津四境の水量を呑流し得ずして盆地の民をして幾度か大洪水の慘害を嘆たしめつゝあるのでも推し得らる。近年に於ける阿賀川蛇行線の切斷は、内務省治水工事この水害を緩和せん事を主眼として生れたものである。山深くして河流多く且つ湖沼に富み先史時代の樂天地であつた會津は、其時代の發達に特殊の相を見せて居るけ

れども原史時代にありては如上の理由を以て開發の差を見るに至つたのであらう。而して會津盆地原の耕地としての完成は有史時代に入つてからであつて、その後幾度かに亘る越人の移住の刺戟を受けて此地の文化の花は咲きほころるに至つたのである。

第五章 結論

三二

本縣三區系の古墳に就てその型式を觀察すれば、封土を有するものゝ多くは圓墳である、徑は四五間、高さ六七尺より徑二十間、高さ二十尺程度のものである。瓢形墳は數全體を通じて十三長徑三十間程度である。方形墳は數三、いづれも墳丘は大でない、これを近畿方面の周圍三十町といふが如き墳丘に比較すれば規模は全く小である。それはその時代に於ける此地の人口と強制力の關係であつて、巨大なる墳丘を營造する人夫の不足、人夫を使役する強制力の微弱なるの然らしめたので墳丘の小が大化陵墓制の制限に基づくものでもなく、必ずしも古墳時代の末期を示すものでもない、それから殖輪を伴ふもの海岸帶に於て五ヶ所、中央帶に於て三ヶ所、會津に於ては一ヶ所も見當らぬ、横穴古墳は海岸帶に於て最も多く、これは海岸地の丘陵が海成段丘の破壊に成り、その破壊崖の露出が横穴墳の營造に利便を有したからである。中央地帶に於ては北日本中帶火山脈の南北を貫通して各所に安山岩質の礫灰岩の積成を見たれど、これは岩質堅く海岸方面のそれとは甚だ

しき差異あれば横穴墳の分布は貧弱である。會津益地帶に於ても同様の關係にて横穴墳は發達しなかつた。我國に於ける先史時代は大陸文化の刺擊を受けて徐々として其幕を閉ぢ原史時代が生れた。先史時代は大陸文化に於て異彩を放つた此地域も原史時代の文化に於ては有力なる大陸文化をよりよくより早く受容する便益を有したたが、關西方面に比して著しく遜色を見るに至つたのは無理もない。關西方面に於ては大陸文化の移植受容に幾多の段階ありて原史時代後有史時代に入りてもその文化相に就て飛鳥、白鳳天平と分ち得るけれども、此地に在りては原史時代の末期は奈良朝に接續する、石城郡磐崎村大字西郷横穴墳、奥壁に佛の字を存し、相馬郡小高町大字吉名^{ヨシナ}の横穴が石窟佛と聯結するの現象によりても窺知し得らるされば、予が古墳分布の状態を基礎として、和名抄^{ハナシ}、奈良平安朝に亘る地方行政區劃名^{ハセ}の位置を推断せるは相當なる學術的根據を有するものと思考する。

予は古墳の分布状態を通觀して原史時代の地方の發達は、耕作に最も有利なる條件を具備する土地の大小廣狹と、其地に於ける天然資源の分量如何によつて定

まるものであるとの結論を得た、彼の出雲の國吉備の國が上代史に占むるその高き位置はその砂鐵の產に負ふ所大なるべく、大和、日向、毛野^{マニ}、秩父^{チフ}の國の發達もその有する天然資源を背景としたものである。東北に於ける中世代の安倍氏の富強、藤原氏の榮華は其地の天然資源を見ずしては説明し得ぬものである。また原史時代の末期より奈良朝平安朝にかけて、中央の支配力が東北に集中したのは、中央に於ける文化の進展が勢財源の涸渇を來たし、その財源の缺乏を補ふべく豊富なる東奥の天然資源に向つて權力の發動を見たものとも解し得よう。

福島縣に於ける古墳分布の狀態附錄

福島縣古墳分布一覽表

古墳分布一覽表

海岸帶の部

字諏訪下

飯野村大字下荒川字五里内

石城郡飯野村大字南白土字大作

大字谷川瀬字堂ノ入

夏井村大字菅波

荒田目字申塚

平町 長橋町

内郷村大字高坂字臺

大字内町

好間村大字北好間字上野

大字小谷作

石城郡平窪村大字上平窪字横山

字富岡

字酢釜

石城郡平窪村大字上平窪字横山

字富岡

横穴群

同	大字中里稱蕨ヶ岡	圓墳群
同	大字龍崎	橫穴群
群同	川東村大字田中字東館	圓墳群
同	大字市ノ關字前田	橫穴群
岩瀬郡	濱田村大字前田川字大塚	圓墳
同	字伏見	橫穴群
同	大字和田字大佛	圓墳
岩瀬郡	濱田村大字濱尾字兜塚	圓墳
石川郡	川東村大字下小山田字北ノ内	圓墳
同	同小鹽江村大字鹽田	圓墳
石川郡	小鹽江村大字鹽田字大草	圓墳
同	字大塚	圓墳
同	大字堤字前原	圓墳群
岩瀬郡	稻田村大字保土原字保土塚	圓墳群
同	字大池下	圓墳
同	廣戶村大字白子	圓墳
岩瀬郡	稻田村大字稻字北木戸	圓墳群
同	梓衝野大字横田字經塚	圓墳
同	仁井田村大字仁井田	圓墳
田村郡	守山町大字谷田川字石塚	圓墳
同	同谷田川村大字谷田字石原	圓墳
同	守山町大字御代田	圓墳
同	高瀬村大字小川字下田	圓墳
同	大字下行合	圓墳群
安積郡	三和村大字鍋山字四十塚原	圓墳群
同	大槻村字大槻	圓墳

安積郡大規村字愛宕東	同	字室木
同	同	字娘夷壇
同	同	字人形壇
同	同	片平村字庚壇原
同	同	富田村字天神南
同	同	字四十壇原
郡山市大字横塚字前田	同	安積郡富久山村大字福原字陳場
田村郡逢隈村大字三丁目字平	同	田村郡御木澤村大字平澤
安達郡本宮町里稱愛宕山	同	大山村大字大江字二子塚
同	同	字南ノ内
同	同	字山崎篠
大字棚山字苗松山	同	同
玉ノ井村字大壇	同	同
字薄黒内	同	同
杉田村大字北杉田字長者宮	同	同
字落合	同	同
嶽下村大字原瀬字諫訪	同	同
安和達郡木澤村大字高木	同	同
針道村字壇ノ平	同	同
字上ノ内	同	同
信夫郡平田村大字平石字石名坂	同	同
杉妻村大字伏拜字梨屋敷	同	同
大森村大字永井川字八幡館	同	同
鳥川村大字下島渡字八幡塚	同	同

同 里稱四十八壇

赤澤村大字赤留

北會津郡門田村大字飯寺字善行院

同 大字黑岩字小田

若松市榮町

北會津郡一箕村大字八幡

湊村大字赤井谷地字平下山

耶麻郡駒形村大字金橋字堰上

大字中屋澤字七ツ壇

喜多方町 字深澤

里稱經塚

岩月村大字宮津字宮地

『群』トセルハは數三個以上

圓墳群

圓墳

圓墳

圓墳群

圓墳

圓墳

圓墳

圓墳群
墳址昭和五年三月二十五日印刷
昭和五年三月二十八日發行

著者兼福島

縣

印刷者 福井安久

東京市芝區田村町五十一番地

印刷所 安久社印刷所